

## 後 記

高塚洋太郎先生が1991年3月末をもって30年にわたって教鞭をとられた関西学院大学を去られることになった。そこでフランス文学科では、『年報フランス研究』の第24号を記念号として、先生への感謝の気持を表すこととした。フランス文学科の教員一同が執筆することは勿論、先生の教えを受けて学院を巣立ち、フランス語学研究者として活躍中の卒業生諸氏にも執筆を呼びかけた。

かくして本誌始まって以来の規模を有する記念号が生まれることになったわけであるが、これほど多数の執筆者を擁する喜びが大きい一方、各論文の量を、極力譲りあって抑えていただかねばならなかった心苦しさも決して小さいものではなかった。しかしそのような制約下に完成された諸氏の論文がどれほど充実した内容を持つかを先生が御覧下さるならば、先生の学恩に報いんとする念のいかに熱いかを感じ取っていただけるものと思う。フランス文学科の授業に御尽力いただいているヴァレンヌ先生が高塚先生を送る一文をお寄せくださった。これにより、本号がまさに記念号としての性格を具えることになったのがうれしい。

高塚先生が創設に力を尽くされ、伊吹武彦先生を迎えて発足したフランス文学科は、発展を続けて間もなく30年を算える。そしてこの30年間、高塚先生は和仏辞典界へ新風を送り続けられたと言える。その第三の御労作が先生の御在任中に完成されたことに心からお祝いを申し上げたい。去る1月22日、最終講義「オック語とフランス語」が学内外よりの出席者を前にして行われたこと、そして御退任後は本学名誉教授となられることをお報らせすべきであろう。高塚先生がますます御健康にて、研究と教育の生活を心おきなくお続けになることを祈念しつつ後記を結ぶこととしたい。

(加藤記 1991. 1)